

夏といえば幽霊という日本人の涼を求める知恵

1 日本の幽霊のはじめは伊邪那美命

日本の夏といえばなんですか。「海」「スイカ」「浴衣」「花火」様々なものが浮かぶと思います。しかし、古来日本の夏といえば「幽霊」というところがあげられます。幽霊といえば、本来は死んだ人が恨みや怨念を持って「念」や「魂」だけがこの世に残ってしまう。その念が強すぎるために、成仏できず、この世にさまよってしまう靈魂のことを「幽霊」「靈魂」で「幽霊」ということなのです。

日本人は古来、神々が様々な役割を人に与えて、この世でその役割を終えると、人間の世界を離れて神々の世界に戻るとされていました。日本の古代では、その神々の世界またはその入り口を「黄泉の国」と呼んでいたし、仏教が入ってからは「天上界」「成仏」などと仏教用語を混ぜて使うようになったのです。しかし、人間界にいる間に、神々の世界に戻るよりも強い念が残ってしまい、そのために、神々の世界に行けないのである。ある意味で、本来の神々の支配から抜け出してしまっており「悪霊」になってしまっていますし、また、その念が強いので執着してしまうということになるのです。

日本で一番初めに「幽霊」になったのは、火の神である軻遇突智（迦具土神）を産んだために陰部に火傷を負って病に臥せのちに亡くなった伊邪那美命です。有名な国生み神生みの神話の中に書かれているものです。すでにご存じと思いますが、簡単に復習しましょう。亡くなった伊邪那美命に会いたい一心で、伊邪那岐命は黄泉の国に行きます。伊邪那岐命は、戸越しに「あなたと一緒に創った国土はまだ完成していません。帰りましょう」と伊邪那美命を誘いますが、伊邪那美命は「黄泉の国の食べ物を食べてしまったので、生き返ることはできません」と答えるのです。古来、黄泉の国のものを食べると、黄泉の住人になるとされていました。ある意味において、新しい土地になれることを「水になれる」という表現をしますが、その土地の食べ物や飲み物を飲んでしまうと、その土地の住人になってしまうという感覚があり、もともとの土地に戻れないということを意味しています。これを「よもつへぐい」といいます。

それでもなかなかあきらめきれない伊邪那岐命の思いに応え、伊邪那美命は「黄泉神と相談しましょう。お願いですから、私の姿は見ないで下さいね。」といい、家の奥に入っていきます。しかし、伊邪那美命がなかなか戻ってこないため、伊邪那岐命は待ちきれずに

中をのぞいてしまいます。そうすると、あの美しかった伊邪那美命の体は腐って蛆がたかり、声はむせびふさがっており、蛇の姿をし八雷神がまとわりついていたのです。

恐れおののいた伊邪那岐命は逃げようとしたが、伊邪那美命は自分の醜い姿を見られたことを恥じて伊邪那岐命を追います。そのおつてからやっとの思いで黄泉比良坂まで逃げてきて千人がかりでなければと動かないような大岩で黄泉比良坂をふさぎ、悪霊が出ないようにしたのです。

日本の場合、伊邪那岐命が黄泉比良坂を大岩でふさぐまで、黄泉の国と日本とは行き来ができたわけであり、その時から、この世に残る靈魂と、黄泉の国に行ける靈魂の差ができることとなります。そして、死んでしまうと体は腐ってしまい、黄泉の国の住人になって次の役割を待つことになるのですが、それができない人々の霊がこの世にさまようことになってしまうのです。

2 恐ろしくも強いものに畏敬の念を抱く日本人の特徴と幽霊

神生みの神話は様々なことを教えてくれます。

例えば伊邪那美命という神を生む神であっても、死んでしまうと黄泉の国で体が腐ってしまうということです。他の国では神々の国では常に美しい顔をして幸せに暮らしていると考えていますが、日本の場合は肉体は滅びるものとして認識が出ているのです。日本人の中では神々は人間と一緒に暮らしており、人間と同じように存在すると考えられています。その神々に関しては、神々が人の形をしている場合も、その人としての「形」は、人間の肉体と同じように腐ってしまうということです。

また、その腐った肉体と別に伊邪那美命は黄泉神と話したり伊邪那岐命を追いかけてきたりします。要するに、人の形をした肉体とその肉体を動かしている魂は別であるということが考えられていたのです。神々は、当然に魂も神々であり、人間は、神々の域まで達していないので、たまにその魂の部分がさまよってしまうということになります。神々の魂はそのまま人間の世界で祀られ、人々を鎮守します。人間の中でも神々の域に達した人々は、学業の神様である菅原道真のように祀られることになるのです。

そして、もう一つは、女性は自分の醜い姿を見られたくないということ、恥の文化が古来には非常に大きく存在したということではないでしょうか。伊邪那美命は、なぜ伊邪那岐命を追いかけたのでしょうか。約束を破られたからではなく、自分の醜い姿を最も好きな人に見られたから、それを無いことにしたいという気持ちの強さでしょう。「好き」な気持ちだが、裏切られたり、あるいは自分の恥ずかしい部分を見られてその関係に絶望してしまった場合、逆に「恨み」に変わるということ、この神話で表しているのです。

女性の恥の観念は別な機会にするとして、幽霊に話を戻しましょう。日本人の場合、日本には八百万の神がいて、その神々が様々なものに宿り、人間の生活を見守りながら日本を一緒になって発展させてゆくという思想にあります。そのために「幽霊」であっても、

神々が変形した姿、または、神々が何らかの形で人間に対して教訓を与えようとしている姿とされているのです。そのために、本来ならば「死」とか「霊」は、忌み嫌われるものでありながら、その片方で、「死」や「霊」を珍重し、またそれを生活の中に取り込むような文化があるのです。

その一つの形態が「怪談話」といえることができます。

日本人は「自分たちの手の届かないもの」に対して畏敬の念を抱く習性がある。そして普段からそのことを意識して生活しなくてよい様に、それらを「忌み嫌うもの」「自分より下のもの」というような位置づけにしながら、何かあった時には「最も頼れる存在」として、中心に据える習性があるのです。神々に関しても、人の世界に出てきた時は普段は「妖怪」「怪異現象」「幽霊」とし、また「黄泉の国」も死後の世界として忌み嫌うけがれたものとして扱いながら、妖怪が出ればそれを教訓として禁忌を作り、怪異現象や自然現象に関しては「荒ぶる神」としてより一層その神を奉ることによって怒りを鎮め、かえって国を平和におさめるように奉るのです。

神々というとぴんと来ないかもしれませんが、日本人にとってはより身近な存在として「女性」がその代表格です。女性は、何も無いところから新たな生命が生まれます。要するに女性の胎内には黄泉の国につながる道がついていると考えられていました。そのために、女性に対しては普段は「穢れている」として男尊女卑の思想の原型になるようにしながら、女性を家や村の中に入れておいて、危険な仕事をさせずに女性を守り、また、神々との交信には、「巫女」としてより黄泉の国に近い人物を使うことになっているのです。この女性に対する畏敬の念は、神々との近さということにより一層鮮明化し、戦国時代に城郭を建設するとき、土地の神々への捧げものとして選ばれるのは「女性」であり、それが「人柱」となった伝説は城をめぐる伝説の中で様々に存在するのです。

このように、日本人は幽霊を海外の「ポルターガイスト」「悪魔」または「キョンシー」のように、単純に「悪魔の化身」として存在しているのではないのです。そのために、怪談話を人々の生活の中に生かしている例がたくさんあり、また、庶民のひとつの楽しみとして怪談話を行うようになっているのです。

3 日本人に語られる日本人に愛される幽霊たち

もう一度繰り返しますが、幽霊は本来は魂として黄泉の国の住人になるべき魂であったものが、強い念を抱いたことなどによって黄泉の国に行くことができずにこの世にさまよっている魂であり、神々とも近いものがあります。怨念であった魂を奉ることによって、その人の特徴を活かす神となっている例は少なくありません。菅原道真の天満宮に代表されますが、そのほかにも「世直し神社」なども人が祀られているものですし、平将門の怨念を静めるための神田明神などもその例になります。ある意味においては「戦争」で亡くなった魂を鎮め、平和な国家を築くための礎とするということであれば、靖国神社も政治的

な論争はあるものの、日本人の心の中ではそのような神社ではないでしょうか。

しかし、祀られていようといなかろうと、幽霊は関係がありません。祀るのは現代の人間の勝手でありさまよっている側がそれで納得するかどうかはわからないのです。そのために、現在でも都市伝説的に平将門の怨霊は話に出ることがありますし、また靖国神社に祭られていても、軍人の幽霊の目撃談などは少なくないのです。

また、そのような話をするのが好きな日本人と言うこともあります。

日本人は、よく言われるように島国の国家であり、ほぼ同じ文化言語で育っている人が全国に住んでいる国家になります。ある意味において、森羅万象すべての責任を一人や為政者に転嫁する事はできないし、また、その島国の中においても地域などによって禁忌が異なる場合があります。そのような場合に、理屈で話をするよりは暗黙の了解で物事を済ませたほうがスムーズに物事が運ぶと言う知恵を日本人は持っていました。そのために、「あそこには怨霊がある」「粗末にすると祟られる」と言うような、理由がつけられない、また人知の世界ではどうにもならない禁忌として、認識するために、怪談や怨霊が多く使われるようになります。

その怪談や怨霊は、はじめのうちは「禁忌」を示したり、誰にも責任を追及できない損害、たとえば地震や日照りなどの自然災害などに対する納得の方法、時には、自分たちではわからないことの理由の説明などに「霊」や「怪異」を使っていたのですが、いつしか、その怪談話だけが独立して、「物語」として、語られるようになります。

何しろ、幽霊は「強い念」を抱いているのです。しかし、その幽霊ももともとは人間です。他の人間にも、幽霊になるほどではないにしても、なんらかのこだわりがあり、また感情が理解できます。それが、物語や作り話として発展させる場合は、人間界ではありえない内容を組み合わせて「幽霊だから可能」と異様な物語の構成になってくるのです。

たとえば、「人を殺す」と言ってしまえば、今も昔も殺人罪になります。しかし、「幽霊が強い念で呪い殺した」となれば、物語の世界ならばそれで「それほど強い念があったのか」と言うような感想を生み出し、そして、念を持った側または殺された側に感情移入して話を読み進め、楽しむことが可能になると言うことになります。

同じ人間であると言うこと、そして、本来ならば自分が成仏すると言うこともかまわずにこの世に念を残すと言うほどの強い念であれば、その一途さに共感する人も出てくる。いつの間にかそのような、たとえば源氏物語の空蝉のような悲恋物語のヒロインは人気を呼び、また、死んでも主君を護る武蔵棒弁慶のような武将は、忠義の士として後世に語り継がれるようになるのです。

4 幽霊と鬼の歴史

それでは、そのような幽霊はいつから書かれるようになっていたのでしょうか。日本最初の書物と言われる「日本霊異記」に、早くも「鬼」という表現が出てきます。鬼は「隠

爾（おぬに）」のオンからきているといわれ、「わからないもの」「日の光を浴びないもの」という意味で使われていました。そしてその意味合いから「鬼」は当初は無くなって黄泉の国に行く前の人の魂が形になったものとして見られていましたが、徐々に、黄泉の国の住人という意味になり、そしていつの間にか閻魔大王の手下で、人間を襲うモノという感覚で見られるようになってきました。

ちなみに、現代の皆さんが「鬼」としてイメージする赤い肌や青い肌、そして角が頭に生えていて、虎の皮のパンツをはき金棒を持っている、そして鬼ヶ島に住んでいて人間を襲う悪役としての鬼が成立するのは、室町時代、御伽草子など庶民の間で文学が出されるようになった時のことであり、ちょうど桃太郎や一寸法師の話と一緒にそのイメージが広まっていったのです。

日本霊異記に出てきた鬼は、当然に「靈魂」という意味の鬼です。当然にその時代は、現在の鬼というイメージはなかったのも、その間はずっと人間ではない怪異現象は、「妖怪」などが中心になります。平安時代に有名な妖怪といえば「鵺」です。鵺は、サルの顔、タヌキの胴体、トラの手足を持ち、尾はヘビで背が虎で足がタヌキの妖怪です。平安時代に鵺が出て、二条天皇を悩ませたために、弓の達人である源頼政に怪物退治を命じました。頼政はある夜、先祖の源頼光より受け継いだ弓を手にして怪物退治に出向き、清涼殿を不気味な黒煙が覆い始めたので、頼政が山鳥の尾で作った尖り矢を射ると、悲鳴と共に鵺が二条城の北方あたりに落下し、取り押さえてとどめを差した。その時宮廷の上空には、カッコウの鳴き声が二声三声聞こえ、静けさが戻ってきたといえます。

なお、鵺を退治したのが源頼政で、その源氏の子孫が平治の乱の後にいずに流されていたことから、源氏の武勇を誇る祭りとして、伊豆長岡市では現在でも毎年1月に鵺払いの祭りを行う風習があります。現代に残る鵺なのかもしれません。

逆に、平安時代はこれらの怪異を自在に操る傑物もいました。陰陽師といわれる人々です。役小角、安倍清明などが代表的です。この人々は式神といわれる妖怪を使い、様々なことを占ったりあるいは操ったりすることになります。卑弥呼からつながる「鬼道」や中国の「卜辞」などと同じで神々の力を借りて将来を予想したり、あるいは吉凶を占うということをしていたのです。この風習は、こののちに戦で命を懸ける武将に引き継がれ、軍師の仕事の一つとして方位や気を読み、軍隊全体を勝ちに導く仕事を行うようになります。室町時代にはこのような軍師の術を専門に学ぶ足利学校が設立されるのです。

片方で卑弥呼の扱った鬼道のように、政治や国家全体を占うモノもありますが、しかしもっと小さな単位で幽霊が出てくることも少なくありません。それは、すでに平安時代に現れています。今昔物語の中には、京都の若者が川に架かる橋に怪異現象が起きるということを知って、肝試しに行く話が出ています。そして、仲間の中の一人が、先回りしてそのものを脅かし、また、ほかの仲間が怖がる仲間を見て楽しむために茂みの中に潜んでいるという話があります。

そもそも今昔物語集には「霊鬼」ばかりを編集した巻（第27巻）があり、その中には

様々な話がかかれていいる。その中で、多くのものはその時の教訓をかいているものである。例えば「嫉妬心から妻が箱を開ける話」（第27巻21話）などは、幽霊から預かった箱を嫉妬深い妻が明けてしまったためにその夫婦が死んでしまう話であるが、その話の最後には「嫉妬心がか強くて、あらぬ疑いなどを持つような女は、夫のためにこういうとんだ結果を招くことがある」というような教訓をかいているのである。もちろん事件がすべてフィクションであるとはいわないものの、幽霊や怪異を使って、逆に現在生きる人々の教訓としていっているのである。すでに平安時代にそのような内容になっている怪談話は、徐々に怪異現象をより一層怖がる子供たちに対する教訓や礼儀、しきたりなどを教える道具として発展してゆきます。そして、その怪異現象の中の一部が、おとぎ話の中に使われ、より親しみやすくなるような話になるのです。先ほど出した「箱を開けて不幸を招く」話は、その話が徐々におとぎ話になってゆき、童話「浦島太郎」の玉手箱を開ける顛末につながります。

このように、怪談話は、片方では人々に教訓を与える話、あるいは心理的な道具として発展してきた部分があり、それは形を変えて童話やおとぎ話の中に入り、子供のころから我々に親しまれてきていいる姿として出てきていいるのです。

5 怪談話と地域性とその口承伝承の拡散

さて、ここまでの話ではなぜ「怪談話」が「夏の風物詩」なのか、まったくわかりません。そこで全く逆の話の一つしたいと思いいます。

上方落語で「無精の代参」といいうものがあります。村で有名な無精者が友人に頼まれて能勢に代参に行くといいう話ですが、その落語に出てくる無精者が非常に素晴らしく、とにかく「一度服を着ると脱がなければならぬから」といいうことで真冬でも裸でいいる。「一度掃除をするとまた散らかるから」といいうことで一度も掃除をしない。一度掃除をすると重要なものまですべて捨ててしまう。それでは寒いので、天井から大きな石を吊り下げておき、いつ落ちるかかわからないとして冷や汗をかいて暖をとっているといいうありさま。無精者もここまで来ると笑い話にもなります。

さて、この無精者のように、日本人は何もなければ「別な感覚」で暖を取るといいう知恵がありました。当然に夏の涼をとるものも同じです。京都貴船の川床のように涼やかな川の上に間を作ってそこにいれば涼しいですが、都会ではそのようないいことができず。そこで、風鈴など高い涼やかな音を聞いて「耳で涼をとる」などの知恵を絞るのです。その中で、怪談話は「怖い話をして心で涼しくする」といいうことが日本人の知恵の中にあるのです。

そこで、今昔物語の中に存在した怪談話は、一つには、教訓や禁忌を伝えるといいう役目を持ちますが、一方では、恐怖の部分を増して徐々に「涼しくなる会談」をいいうものを作り出すようになります。この話の体系は、涼しくなることを目的に話されるものです。そ

のために、いくつかの特徴を持って話が広まってゆくことになります。

一つの特徴は「どこにでもあてはまる」話にすることによって、身近な話として怪談話を語ることに、そしてその話の内容を身近な話として意識することによって、自分の疑似体験のように頭の中の空想で感じることによってより一層恐ろしさを増すように作られています。このことによって、同じような怪談話が様々な場所で少しずつ地域性を増して語られるようになるのです。例えば、江戸七不思議の中の代表的な話である「おいてけぼり」。深夜にお堀で魚を釣っていると、その帰りに「おいていけ」といって怪異が追いかけてくる。ある日、肝試しでその声を無視してその怪異の正体をおぶって帰ってきたものが、翌朝目が覚めると大量の小判があったという話であるが、これが地域によって死体であったり、あるいは、狸、化け猫、河童というように地域によってその正体が変わるのです。特に死体であったという話は、その堀が自殺の名所であったなど、別ないわく因縁がついて話が拡大されてゆくことになります。このようにして、どこかで仕入れた話が、その地域性を持って別な地域で身近な話として使われ、そしてそれがまた独自の発展を行って、怪談話として成立してゆくことになります。

もう一つの特徴は「画像的に明確になるもの」ということがあります。幽霊というと、江戸時代中期に円山応挙が書いた幽霊の図が初めであり、その幽霊の絵が手を下げ、そして下半身が書かれていないことから、いつの間にか幽霊は足がないとされています。しかし、円山応挙の絵の幽霊は顔も美しく、そんなにおどろおどろしい絵ではないのです。しかし、その絵をはじめに、徐々に顔にこぶがあったり目が飛び出ていたりというような視覚的な表現が増えてきて、人々が画像として認識できるような内容になっているのです。誰かの書いた幽霊の絵を見ていれば、その絵の主人公で最も恐ろしいものが怪談話の中の主人公になるような構図です。このように考えると、怪談話ほど視覚的表現の多い話は少ないのかもしれませんが。怪談話で、特に幽霊が出てくる描写は、ほぼ決まり文句になっています。「草木も眠る丑三つ時、陰にこもった寺の鐘がゴーンとなると、その時に生暖かい風がそのあたりを覆い、そうすると、少し先に今まで気づかなかった人影がゆらゆらと柳の木の枝のようにこちらに近寄ってくる。そのものの口は生き血をすすったように真っ赤に塗られ…」というように、一つ一つの現象を説明するのに修飾語が付き、そして、生暖かい風、とか生き血をすすったような、など、一つ一つが色や温度を感じられるような表現になっているのがその特徴です。このように視覚をはじめとした表現でより一層感覚的に涼しさを体感できるようにした工夫が見られます。

このように、怪談話は、はじめから他人を怖がらせることを目的に、人が肌で感じる温度を下げることを行えるように、感覚的な表現を多く入れることで、日本の文学的な発展と、民間の中の想像力をけん引していったのです。

6 江戸町人文化に見る怪談話の完成形と現代のホラーまで

そして、この視覚感覚的な怪談話は、江戸時代に芝居が町人の文化になると、すぐにその戯曲が書かれることとなります。江戸時代の怪談話の二大巨頭といえば「四谷怪談」のお岩と「番町皿屋敷」のお菊でしょう。

ちなみに、日本の幽霊は二つの類型に分かれます。「人を目指す幽霊」と「その場に住み着く幽霊」の二つです。前者を「怨霊」、後者を「地縛霊」などと言ったりします。前者は、恨みがありその恨みを果たすまで自分の仇を追い求め、場所を変えても姿を変えても探し求めて祟りをなす幽霊です。ひどい場合は、何の罪もないその子孫にまで祟りをなす場合があります。一方、地縛霊は、その場所を共有している人であればだれでもその場にいる人の前に姿を現して祟りをなすような霊です。そして「人を目指す幽霊」の代表格がお岩であり、「その場に住む幽霊」の代表格がお菊ではないでしょうか。

人を目指す幽霊は、ほかの人には基本的に祟りを及ぼしません。何しろ仇討がその目的であることから、ほかの人に累を及ぼすことは基本的にはありません。場合によってはほかの人には見えない場合もあります。そして、その仇討ちを果たすと、その怨霊は「思い残すことがなくなる」ので、成仏できてしまうこととなります。そのために、この手の幽霊は完全に怖がらせるための怪談話にしかならず、多くの人に対する広がりを持たないような話になってしまいます。

しかし「その場に住む幽霊」は、その場を共有することによって万人に出てくるのですから、当然に目撃者も多数いますし、何の因果関係もないのにその場を共有しただけでたたられてしまうということになります。そのために体験談もたくさんあり、広くさまざまな話として形を変えることとなります。一般的に怪談話で各地に広まるものは、大抵の場合「その場に住む幽霊」の話であることが多いのです。空き家に怪異が住みついたり、池からきれいなお姫様が出てきて手招きしたりといった類は、空き家のある場所、池がある場所ならばどこでも大丈夫ですし、また大量に人が虐殺された場所は、古代の戦場の跡地ならばどこでもその可能性を秘めていることとなります。

代表格の番町皿屋敷も、その大本は、姫路城城下の「車屋敷」街の武家屋敷であり、もともとは「播州皿屋敷」であったといわれています。そして、10枚セットの皿を一枚割ってしまい、折檻死したお菊が、その死に場所である井戸から毎夜出てきて皿を数えるという話の軸は同じです。この話は、徐々に「9枚というお菊の声を聴くと、翌朝には死んでしまう」というような話に発展してゆきます。

しかし、播州皿屋敷が笑いの中心である大阪に行くと、これが急に笑い話に変換します。上方落語の「播州皿屋敷」では、ある日肝試しに行った仲間が幽霊を見に行く。9枚という声を聴かなければ死ぬことはないのだから5枚くらいで逃げてくれば問題がないということになるからです。そして、その中で最も怖がりの人間が、お菊に惚れてしまう。いつの間にか、そのお菊の美しさにひかれて毎夜毎夜多くの男たちが皿屋敷に集まり祭りのようにぎわいになってしまう。そして、ある日逃げ遅れた人が死を覚悟していると、お菊は「10枚・11枚」と結局18枚まで数えてしまった。死を覚悟した人がお菊に文句を

言う。「明日は風邪でお休みです」というという話になって落ちまでついた完全な落語になってしまうのです。

怪談話であるからといって怖いばかりではなく、いつの間にかオチまでついたしっかりとした話になって広まってゆき、幽霊までも笑い飛ばしてしまう。それが日本人の精神的な強さであり、そしてそのような変換をできることが日本人のタブーを超える力につながっているのではないのでしょうか。

さて、このように二大巨頭の幽霊まで笑いに変えられてしまうと、いつの間にか怪談話はより一層恐ろしいほうに、また一方ではそのより一層怖い話をより面白い方向にして中和しながら発展してゆきます。この流れが江戸時代後期に「雨月物語」のようになり、しっかりとした文学として発展してゆきます。また落語や芝居では演目に『牡丹灯籠』・『怪談乳房榎』・『お菊の皿』・『質屋蔵』・『真景累ヶ淵』・『反魂香』・『もう半分』・『子育て幽霊』・『菊江の仏壇』などが発展してゆくこととなります。明治時代に、この怪談ブームに驚き興味を示した外国人、ラフカディオ・ハーンは、これらをまとめて日本名小泉八雲で「怪談」として出版し、ヨーロッパでも広く読まれるようになったのです。また、昭和になればこれらの伝承に興味を持った柳田国男が「遠野物語」で、口承伝承でしか残っていない怪談を文献として残すことを行い、そこから民俗学という学問が発展してくるのです。

7 怪談が流行する背景

さて怪談に関してみてきました。しかし、「涼しくなるためになぜ怖い話をするのか」という疑問にはまだ答えきれていないのかもしれませんが、そこでもう一つ怪談が流行する理由を考えてみましょう。

怪談話が流行するのはどのようなときでしょうか。実は、日本人が「死」と最も遠いときに、想像の中で「死」を恐怖するときが怪談話が最も流行するときなのです。要するに、「平和」なときが、最も「怪談話」が流行するときです。上記の文章でもお分かりのように、怪談話が文献に最も多く残されているのは、平安時代と江戸時代。要するに平和な時代が長く続いたときに、怪談話が多く語られることとなります。

日本人は、不安定なものと未知なものに得体のしれない恐怖を感じます。これは日本人だけではなく世界各国どこも同じなのかもしれません。不安定なものということは「生と死の境」などちょうど「境界線上」のところを言います。このほかにも一日の境界線といえば夕闇時ですし、また、寿命の境というと老人ということになります。逆に生まれる側との境目で女性が黄泉の国とつながっているということが言われていることはすでに説明したとおりです。これらを合わせると、例えば、陸と水の境界である河原に、老婆が夕闇時に一人で佇んで、不気味に笑ってこちらを見ていると、得体のしれない不安と恐怖が襲ってくることとなります。世界各国でも同じというのは、アメリカのホラー映画で「トワイライト・ゾーン」というものがありますが、まさにこの境界の不安定さを恐怖するとい

うことが、映画の題名になっているのではないのでしょうか。

しかし、戦争の時になれば、これらの教会の人々は最も先に守られる人ばかりであり、時代の主人公になることはありません。まさに国境という境界は、最先端の戦場であり、得体のしれない恐怖ではなく、現実の死と直面する場所になってしまうのです。そのために、怪談話が戦場で、または戦中に行われることは稀です。怪談話が出てくるのは、戦死者が返ってくるという悲しい話か、教訓の怪談ということになります。

要するに、怪談話をしているということは、ある意味でその話が行われている場所は「平和である」ということなのです。平和であるということはある意味で刺激がなく、そのために暑さなどをより一層感じてしまうのです。また、人間が恐怖する「境界」も、平和であれば自然が作り出す境界以外にはなくなってしまう、国境などの境界が「安定したもの」になってしまうのです。

そこで、日本人は平和な時代に「境界」を作り出し、その境界を逸脱してしまった怪談話を平和の中で「絶対に安全である」ということをかみしめながら恐怖を味わっているのです。反語的な表現かもしれませんが、まさに、怖い思いをすること、スリルを味わうことを楽しむということで、遊園地のジェットコースターと同じ役割をはたしていた一つの娯楽なのかもしれません。

このように考えると、宗教的なタブーはあるとしても、世界各国で平和に怪談話ができるような時が来ると、それは世界全体が平和であるということの証明なのかもしれません。昨今、日本のホラー映画がアメリカのハリウッドでリメイクされていることが良く聞かれます。まさに、日本もアメリカも平和を謳歌している証拠ではないのでしょうか。いつまでも平和な怪談話が発展し時代に即した怪談話ができるようになることを、強く願っています。